

説教：日本聖公会 女性の司祭按手 20周年

／テリー・ロビンソン司祭

(アングリカン・コミュニオン・オフィス「教会と社会における女性」部門ディレクター)

場所：東京教区 聖アンデレ主教座聖堂

テーマ：新しい歌を主に向かって歌おう

日課：イザヤ書 第35章1～10節

詩編96編、

ヨハネの黙示録 第21章1～7節

今日ここに、日本聖公会における女性の司祭按手20周年感謝礼拝を、皆さんと共にささげられることは、特別な光栄であり名誉なことです。1998年の12月に、マーガレット・渋川良子さんが司祭に按手されて以来、皆さんは長い道のりを歩いてこられました。ナタナエル首座主教、女性デスク、そして私がここに来るために関わってくださった全ての皆さんに深く感謝します。また、日本到着以来の素晴らしい歓迎と親切なおもてなしにも感激しております。ありがとうございます！

私たちは今日、共に祝い、希望と喜びの将来を見つめています。しかし同時に、私たちをここまで導いた旅路をも振り返っています。

私たちクリスチャンの信仰の歴史の中で、女性たちは、常にきわめて重大な役割を担ってきましたが、彼女たちは簡単に忘れ去られたり、見落とされたりしてきたように見えます。私の教会、つまり英国聖公会では、16世紀の宗教改革以来1980年になって初めて、教会暦の祝日に当時存命中だった人々を選んで加えました。

その時に選ばれた20名の英国人の中に、たったひとり女性が含まれていました。

彼女はジョセフィン・バトラーという名前で、19世紀における女性、ことに貧困により見捨てられた女性たちの、教育環境や公衆衛生の改善に向けて、とても大きな役割を果たした社会改革家です。最初の投票では落とされましたが、最終的には、リストに加えられた20人中、唯一の女性として彼女が選ばれました。

教会暦の祝日に加えられるため選ばれた人々のリストですが、このケタ外れの男女比率のアンバランスについて、公式の説明としては、「本来記念されるのに相応しい他の女性たちもいるにはいるが、彼女等については、ちゃんとした記録が保存出来ていないから」ということになっています。しかし、人選のリストアップをする委員会の責任者は、非公式にはこう言ったそうです、「男性においては高潔さと受け取られるようなふるまいと同じことを女性が行うと、しばしば狂気の沙汰として受け取られる。だからこういう結果になった」と。

今日、私たちは女性の司祭按手を祝っています。そして私たちは、確信と希望的観測とともに、これからの未来を見つめています。私たちは、喜びと歓喜と共に、新しい歌を主に向かって、思い切って歌いましょう。しかし同時に、私たちが何処からやって来たのか、ということに心を覚えなければならないと思います。女性たちは今や、キリストにおける兄弟たちと並んで、司祭として仕えています。しかし私たちは実際、追放の地からやって来たのです。そこでは私たちは、証し人としても、世界に対するキリストの器としても、女性が十全に神に仕えることは許さないという地から、やって来たのです。

今日ここにおられる女性司祭たちは、パイオニアです。彼女たちは新しい地を切り開いた女性たちです。私は心から望みます、次世代の司祭たちがこの人々を覚え、そして彼女たちの物語を心に刻んでくださるよう。また、彼女たちがそして私たちが、かつてはよそ者だったということ、そして追放された地からやって来た者であるということ、覚え続けられますように願っています。というのは、追放された者であり、またよそ者だった記憶こそが、他者から「よそ者」と分け隔てられている人々の個々の体験を理解し、世界の片隅に押しやられている共同体と連帯するために、私たちを助けてくれるからです。

神の民の物語は、まさに追放の歴史でした。それは、異国の土地で、彼らの歌を歌う人々の物語であり、故郷への帰国にあこがれ、悲しみもため息も去り、喜びと歓喜とで満ちた時代を切望する人々の物語でもありました。そしてこの歴史は、私たちのDNAの一部となり、私たちは誰なのかという問いに答えることにも繋がっています。

今日の日課のひとつである、イザヤ書の聖句は、エルサレムの神殿崩壊後、古代ユダ王国から強制的に連行され、バビロンで捕囚となっていた人々に対する呼びかけです。預言者のこの呼びかけは、希望と励ましに満ちています。

「荒れ野よ、荒れ地よ、

喜び踊れ」「砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、満ち溢れるほどに咲かせよ」

「強くあれ」と預言者は言います。そして「恐れるな」と。

「恐れるな」 私たちは追放の地からやって来ました、そして私たちは、聖書と時代を通じて、この言葉が響き渡るのを聞いています。

「恐れるな」 これは、天使ガブリエルがうろたえるマリアに挨拶した言葉でもあります。そしてマリアの人生はこの時から永遠に変わることになりました。

そしてまた、最初の福音の証し人となる前に、からっぽの墓の前で悲嘆にくれていた女性たちに対し、天使が送った言葉でもあります。

「恐れるな」「急いで行って話しなさい」

女性の聖職按手への歩みも含めた様々な慣習の変化は、私たちの教会、世界の聖公会においても、しばしば不安と恐れを伴います。聖霊が私たちに注意を促したり、そとせついたりする時に、痛みを伴うこともあります。

私は全聖公会中央協議会事務局「教会と社会における女性」部門のディレクターとして奉職していますが、それはまさに私の体験でもあります。性差による偏りを話題にすると、恐怖に陥ったり、脅されているという気持ちになったりする人がしばしばいました。というのは、性差による様々な偏りを是正するために活動することは、何かが劇的に変わってしまうという可能性があるからでした。現状に課題をつきつけられると、しばしばその人々は、何かを失う恐ろしさでいっぱいになりました。それは「私が信じているものを、全て失うにちがいない」と思ってしまうからなのかもしれません。慣れた方法ではなく、思考し生活を再検討するような新たな道へと向かう道中では、全く馴染みがないと感じるところか、脅されている、的はずれなことをしている、とさえ感じ得るものなのでしょう。

クリスチャンたる私たちは、人が深い変化へと促される時、無防備になる覚悟が必要であることを知っています。また、それまで確実だと思ってきたことを、あえて手放して初めて、新しい可能性に満ち溢れた何かを発見し手に入れることが出来る、ということも、すでに知っています。

皆さんは、ある小さな男の子のこんな物語をご存じかもしれません。

その子は、浜辺で貝殻を集めて遊んでいました。広い浜辺でたくさんの貝を見つけ、夢中になって集められるだけの貝拾ったので、やがてその小さな両手は、貝でいっぱいになりました。しかしさらにその男の子は、波で打ち上げられたヒトデを見つけました。それは、並外れて美しい特別なヒトデでした。小さな男の子は、ヒトデを欲しいと思いました。彼の両手はすでに集めた貝でいっぱいでした。その子は近くにいた父親を、悲しそうな顔をして見つめました。その子は、特別美しいそのヒトデを、何としてでも拾いたかったのです。彼の両手は貝でいっぱいでしたが、でもそれまでに集めた貝を手放すことができませんでした。

実際は私たちが罫に押し込めているものの、限られた文化の中では定着してしまっている様々な支配と従属の制度を、また、それまで馴染んできた考え方やふるまいを、一旦手放すことが、時には必要となります。手放した時、私たちは自由になり、様々な発見ができるようになり、「真実は私たちが自由にする」ことを本当に理解していくのだと思います。また、不安や功名心の中に人を閉じ込め続けるような力を持つ、様々な通俗神話や、振り曲げられた神学から解放された時、私たちは自由な人間となります。寛大で和解を求め、人道的で神の愛に最も大きな権威を認める私たちは、真に自由になります。

オーストラリア聖公会の司祭であり、また神学者でもあるサラ・バッシュラードは、「この変化のための働きが拒絶され妨害されたら、私たちは何ができるだろうか」と問うています。

彼女は言います。「誘惑とは、私たちの活動の中で、冷ややかになったり撤退したりすること、あるいは不安になりますます逆上したりすることです。切迫した欠乏状況があると、女性や子どもたちは、日常的に奴隷として不正取引の対象になります。それは、どんどん広がる性質を持った病気のようなもので、性差を利用した暴力でもあります。環境の変化や不法な取引、国全体の経済の枠組みにより、経済的にもまた意志決定の場においても排除されるなど、深く差別されている女性たちの姿があります。ここでは、絶望と恐怖は、自然な反応です。しかし、イエスの言われたことを他の言い方で言うと、「それは私たちの間にあってはならないこと」と私たちは信じています。私たちが参加するようと招かれている根気強い正義と和解への働きは、神の仕事なのです。私たちは、全身全霊を傾けて神に自身を明け渡し、不安や逆上ではなく、知性と価値ある参与へと呼ばれているのです。また私たちは、何かに対する反作用として行動を起こすのではなく、祈りや傾聴を基にし、また識別力を土壌にして育つ誰にも妨げられない熱烈な愛に基づいて、預言者的に行動すべきです。」

「恐れるな」私たちのキリスト教の信仰は、ひとりひとり等しく神のイメージとして創られ、私たちをも含め神は創られたもの全てを愛していると教えます。

イエスは、女性たちと共に働かれ、また彼の時代の教義とは異なりましたが、女性たちに権威を与えることも、決してためらったりしませんでした。イエスは女性たちが居る場所にも出かけて行きます。女性たちが集まる井戸端で、イエスはサマリア人の女性に会い、話しかけます。この出会いの後、このサマリア人女性は、イエスの福音を証しする人として、彼女の村へ走り戻ることとなります。「来て、見なさい。来て、見なさい。私はこの人こそが救い主だと思う。」そして村人は、やって来て見ることとなります。

マリアとマルタという姉妹は、イエスの一番親しい友人であったことでしょう。マリアが男性の弟子たちと共に彼の足元に座り、その教えに耳を傾けられるよう、イエスがどんなふうに、マリアを励ましたか、心に覚えましょう。社会全般の規

範と性差についての規範が、根深く人々の間に浸透していた当時、それら規範の限界をはるかに越えて、イエスがどんなふうにと接しておられたか。でもこれは、ほんの一例に過ぎません。

イエスが教えるたとえ話の中では、神をとえるのに、奉仕する女性たちを登場させます。10 個のコインのうちのひとつを失くし、それを見つけるまでずっと探し続け、見つけると歓喜したあの女性を思い出してください。

イエスは女性たちを癒し、そして彼女たちの尊厳を回復させます。多量出血の止まらない女性がイエスの上衣に触れると、イエスは言います「娘よ、あなたの信仰があなたを癒した」この女性は長い間、村八分にされ、社会集団のすみっこに押しやられていました。彼女が住んでいた共同体では、つまり彼女を取り巻く文化においては、その女性は「まとも以下」と見なされていたからです。そしてその女性は、イエスと出会った結果、身体が癒されただけでなく、ひとり人間たる力を取り戻しました。彼女は、置かれた状況を変革し行動する力量があると、彼女自身も認知し、イエスはそれを確かなものとししました。「娘よ、あなたの信仰があなたを癒した」

イエスは、12 歳の女の子、ヤイロの娘も癒しています。「タリタ・クム」と彼は言います。「少女よ、立ち上がりなさい」

福音、良い知らせとは、すべてのものが、キリストにおいてすでに新しくつらわれているということです。福音とは、キリストにおいて、すべての人々が自由へと解放されることです。女性、男性、女の子、男の子、私たちひとりひとは、物理的な限界を越えて、文化的な無知を越えて、また政治的社会的な体制をも越えて立ち上がり、十全なひとり人間として生き、神からの呼びかけに答え、イエスがすでに始められている働きに自ら加わるために、自由の身にされているのです。

私は、全世界の聖公会の交わりの中で、たくさんの人々が皆さんと共に今日、歓喜の声を上げていることを保証します。また、過去 20 年間に按手されたパイオニアたる女性たちの足跡を、もっとたくさんの女性たちが踏み、それに続くことを願っています。そして、聖職でも信徒でも誰に対しても、与えられているいのちとそれぞれの使命を見出し、どのように神に栄光を帰し、また世界に存在する神のミッションをどのように識別していくか、その道は、私たちひとりひとりに向かって開かれています。

恐れるな！思い切って新しい歌を主に向かって歌いましょう。

思い切って歩み出し、異なる旋律に向って、躍動しましょう。アーメン！

(祈り)

聖なる神よ、あなたは私たちを励まし揺り動かすために、またあなたが授けてくださる賜物を私たちの中で目覚めさせるために、聖霊を送ってくださいます。

私たちが将来へと足を踏み入れる時、私たちの恐れと不安を取り除いてください。そして私たちに預けてくださった目標に取り組むための時間、道を開くための平和、働きのための知恵、そして共に歩む友人、そして終わりなき愛をお与えください。イエスのみ名によって、アーメン

(翻訳：上田亜樹子司祭)